

社会福祉を専攻する学生の老人のイメージ

－セマンテック・ディファレンシャル法 (SD 法)を用いた老人のイメージの測定－

高 橋 一 公

I はじめに

1. 老人観の定義とその規定要因

老人観は一般的には「高齢者に対する漠然としたイメージ」としてとらえられることが多いようである。しかし、佐藤（1993）は、老人観は「老人を対象とした時の生物的・心理的・社会的な側面に対する視点であるとともに、老人への対応や行動の心理的基礎をなす概念である。したがって、老人に対する態度を中核とするが、イメージ、意識、感情なども含んでおり、さらには老化（aging）や老年期の生活をも対象とする包括的な概念である。」と定義している。さらに、老人に対する個人的な態度やイメージなどが多くの人に共有されステレオタイプ化した場合、それらは社会的老人観として福祉政策などの政策理念にも影響し、子どもの躾や教育などにも影響するとしている。

「老人観」に関する研究は国内外で多くの研究が行われてきているが、統一した概念で行われているとはいえず、「老人イメージ」「老人観」「老年観」「老人像」という用語が用いられている。いずれも「老人をどのようにとらえているのか」という意味で用いられている。中谷（1991）は、主観的な評価としての態度（attitude）という意味を含ませて、「老人観」を「高齢者に対する主観的なとらえ方」と定義することを試みている。しかし、定義としては厳密なものとは言えず、この概念を支える理論構成がいまだ不十分であるということ、社会心理学で用いられている「態度」という用語のとの混乱を引き起こすという理由から、あえて「態度」という用語を用いることを避けている。

現代日本における老人観を規定する要因として参考になると思われるのが『老人福祉法』の条文である。1963年に制定された老人福祉法の基本理念である第2条には、「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として敬愛され、かつ、健全で安らかな生活を保障されるものとする。」となっていた。森（1989）は、この条文について「これは老人も昔は経済活動人口、生産年齢人口であったことに着目し、経済活動の見地から老人を『労働力』の延長線上に置いて把握したものだ」と述べている。この基本理念は1990年の老人福祉法の改正により、「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として、かつ、豊富な知識と経験を有す

る者として敬愛されるとともに、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする。」と修正された。そこには豊富な知識と経験に対する敬意と老人の自主性が表現されるようになったが、老人を労働生産性の延長上に置くことから脱却したとは言いがたい。

それでは、若者たちは老人をどのように見ているのであろうか。高齢者のイメージについては下記に譲るが、意識的な問題として高齢者と若者の間には心理的な距離があると考えられる。保坂と袖井（1986）によると大学生は老人の人格や存在意識は認めているものの「老人と近づきになりたいと思いますか」という質問に対しては「何ともいえない」と答えたものが4割と多く、老人とは一定の距離を置いて接したいという大学生の態度が現われていると論じている。

中谷（1991）は、前述した通り定義としては厳密なものではないとしながらも「高齢者に対する主観的なとらえ方」という態度的な意味を含ませた「老人観」という定義を用いて児童の老人観の測定を試みている。その結果「身体に関する老人観」「情緒に関する老人観」「行動に関する老人観」という3つの主成分を抽出し、児童のポジティブな老人観に影響を与えているものは児童と高齢者との交流の頻度であることを見出している。特に高齢者の情緒面に対する評価について中谷は、「高齢者を単に目にすることによって形成されうる身体面・行動面の評価とは異なり、高齢者との対話などにより密度の濃い交流によって形成されることを示唆していると思われる」としている。

2. 「老人」のイメージ

現代日本人の老人観に関する研究は「老人」のイメージ測定と関連づけて行われているものが多い。保坂と袖井（1986）はセマンティック・ディファレンシャル法（以下SD法）を用いて大学生の老人に対するイメージの測定を試みている。その結果、大学生の抱く老人のイメージとしては、「あたたかい」「やさしい」というポジティブなものと、「弱い」「頑固な」というネガティブなものが強く表れていると報告している。老人観に対しては社会に対するネガティブ要因としての老人の存在を認識しながらも、高齢者に対して好意的・同情的な態度をとる大学生が多いとも論じている。さらに保坂と袖井（1988）は50項目からなるSD法を用いて高齢者のイメージの分析を試みている。その結果、大学生の抱く老人のイメージはどちらかというところネガティブであるとしている。因子分析の結果として「有能性」「活動・自立性」「幸福性」「協調性」「温和性」「社会的外向性」の6つの因子を抽出している。この6つの中で「有能性」と「活動・自立性」を老人のイメージを規定する重要な因子としてとらえ、大学生は「有能性」についてはポジティブな、「活動・自立性」についてはネガティブな評価をしていると報告している。そしてこれらの因子に対して、老人問題に対する関心や学校教育の中での正しい高齢者に対する知識の伝達に代表されるように、若者がどのような情報に接しどのような姿勢で老人に接し

ているかが重要な規定要因になっているとも論じている。

小中学生を対象とした老人のイメージの研究では中野ら（1991、1994）のSD法を用いた研究がある。主成分分析を用いて「評価」因子と「活動性」因子を抽出している。そして小学生は両因子に対してポジティブに評価しているのに対して中学生は第2主成分の「活動性」についてややネガティブな評価していることを見出している。しかし、小中学生のイメージする「おとしより」は一般的に考えられているものよりも若く元気な「おとしより」をイメージした可能性が高いことも指摘しており、特に小学生が老人に対してポジティブなイメージを持つことは当然のことかもしれないと論じている。また老人のイメージを規定する要因として最も重要なものに「老人との過去の経験」をあげ、保坂らの老人のイメージを規定する要因としてあげた「老人との現在の交流」とは異なった結果を示している。いずれにしても幼少期の経験が老人のイメージ形成に重要であるという示唆は興味深いものである。

中高年の老人のイメージについては古谷野ら（1997）がやはりSD法を用いて測定を試みている。因子分析の結果、「力動性」「親和性」「洗練さ」という3つの因子を抽出し、いずれもポジティブな評価がされていることを報告している。しかし、「力動性」については女性より男性の方が、また高学歴の方がネガティブなイメージを持つ傾向が見られたことも論じている。これは保坂らの「有能性」と「活動・自立性」の因子において男子学生が老人に対して女子学生よりもネガティブな評価していることとも一致した傾向としてとらえることができる。さらに古谷らは、中野らの知見をふまえて、幼い時にポジティブであった老人のイメージが青年期にネガティブなり、さらにその後、ポジティブになっていく可能性についても言及している。

看護学生に対して行われた大塚ら（1999）のSD法を用いた老人のイメージに関する研究では、老人に対して全体的にポジティブなイメージを持つことが示されていることが報告されている。具体的には「暖かい」「尊敬できる」「思いやりがある」「やさしい」という項目でポジティブな評価がされ、「考えが古い」「頑固」「弱い」という項目でネガティブな評価がされているとしている。さらに老人のイメージに深く関与していると思われる要因として「祖父母との会話の頻度」をあげ、老人看護教育において老人との会話を持てるようなさまざまな機会を提供することの必要性を論じている。

Ⅱ 研究の目的

1987年に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、社会福祉士と介護福祉士の国家資格が新たに創設された（精神保健福祉士は1997年の「精神保健福祉士法」の制定まで待たなければならなかった）。この福祉の専門資格を目指す学生たちはどのような「老人観」を持っているのであろうか。看護学生に対する老人観に関する研究はいくつか見られるが、介護福祉士や社会

福祉士を目指す学生に対する「老人観」に関する研究はいまだ十分とはいえる状態にない。今回は介護福祉士養成コースあるいは社会福祉士養成コースに在籍する専門学校生、短期大学生、4年制大学生を対象に、学生がどのような「老人」のイメージを持っているかを検討することを目的とする。

Ⅲ 方法

1. 対象

介護福祉士、社会福祉士などを目指す専門学校生、短期大学生、4年制大学生332名（男性104名 女性225名 無回答3名）。調査対象の学生は少なくとも10ヶ月以上の専門教育を受けてきているものとした。平均年齢は19.89才（標準偏差は3.15才）。

2. 調査方法

表1 各項目の平均値と標準偏差

項 目	度 数	平均値	標準偏差
静的-動的	326	2.448	0.720
冷たい-暖かい	326	4.120	0.777
悲しい-うれしい	325	3.028	0.751
ひどい-すばらしい	326	3.874	0.819
醜い-美しい	325	3.434	0.773
話にくい-話しやすい	326	3.693	0.982
まずしい-裕福な	326	3.209	0.674
病弱な-元気な	326	3.236	0.882
邪魔な-便利な	324	3.194	0.530
だらしない-きちんとした	325	3.609	0.815
誤った-正しい	326	3.589	0.758
暇な-忙しい	323	2.495	0.817
きたない-きれい	325	3.231	0.702
愚かな-賢い	326	3.939	0.805
遅い-速い	324	2.222	0.695
小さい-大きい	326	2.709	0.979
弱い-強い	326	2.761	0.924
鈍い-鋭い	326	2.801	0.918
無能な-有能な	325	3.674	0.792
嫌い-好き	324	4.210	0.790
低い-高い	325	3.089	0.771
劣った-優れた	326	3.629	0.834
わるい-よい	326	3.816	0.868

各学校ごと集合方式で調査を実施した。実施時期は平成18年1月～2月で該当学年の学年末に調査を行った。イメージの測定は23対の形容詞からなる Semantic Differential 法（SD法）を用い、それぞれの形容詞対には5段階の評定尺度（非常に・やや・どちらともいえない・やや・非常に）を付して評価を求めた。

また、「祖父母との同居経験」については「同居している」「同居したことがある」「同居していない」から、「高齢者との交流経験」については「多い」「普通」「少ない」「わからない」から主観的な判断として回答を求めた。

Ⅳ 結果

1. 対象者の基本的属性

調査対象者の所属は4年制大

学生103名 (31.02%)、短期大学生139名 (41.87%)、専門学校生90名 (27.11%) であった。また目指している資格として「介護福祉士」が220名 (66.26%)。「社会福祉士」が86名 (25.90%)、その他(精神保健福祉士、ホームヘルパー、保育士等)が9名 (2.71%) であった。「特になし」「無回答」が合わせて17名 (5.12%) があった。

「祖父母との同居」については、「同居している」が144名 (43.37%)、「同居したことがある」が79名 (23.80%)、「同居していない」が109名 (38.83%) であった。

「高齢者との交流経験は？」という問に対しては、「多い」が156名 (46.99%)、「普通」が123名 (37.05%)、「少ない」が47名 (14.16%)、「わからない」が6名 (1.81%) であった。

2. 各項目の平均値

各形容詞対の平均値(標準偏差)は表1のようになった。逆転項目については補正後の値を示した。右側にポジティブな形容詞を置き、方向性を統一した。

全体的にポジティブな評価がなされているが、特に「冷たい-暖かい」4.120、「ひどい-すばらしい」3.874、「話しやすい-話にくい」3.693、「だらしない-きちんとした」3.609、「誤った-正しい」3.589、「愚かな-賢い」3.939、「無能な-有能な」3.674、「嫌い-好き」4.210、「劣った-優れた」3.629、「わるい-よい」3.816でポジティブな評価がなされている。

逆に「暇な-忙しい」2.495、「遅い-速い」2.222、「小さい-大きい」2.709、「弱い-強い」2.761ではネガティブな評価がなされていることが示された。

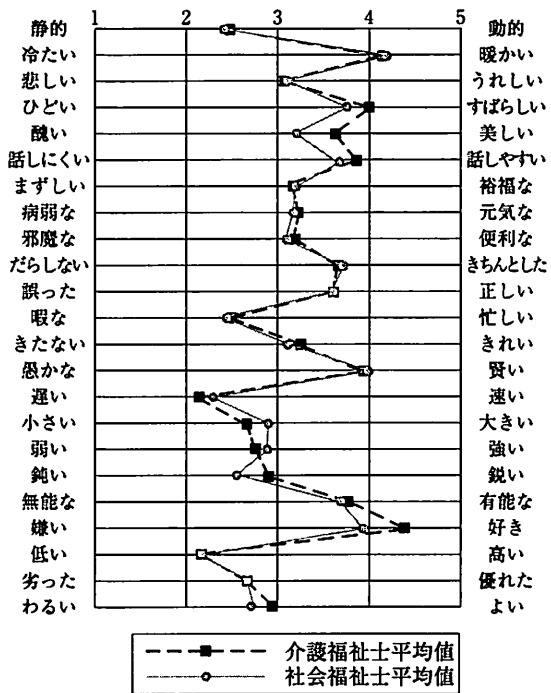


図1 介護福祉士と社会福祉士資格取得希望学生の「老人」イメージのプロフィール

3. 介護福祉士資格取得希望学生と社会福祉士資格取得希望学生の各項目の平均

介護福祉士資格取得希望学生と社会福祉士資格取得希望学生の各項目のイメージプロフィールは図1のようになった(各群の平均値と標準偏差は資料1参照)。さらに各項目毎にT検定を行った結果、「ひどい-すばらしい」($t=2.431$ $df=299$ $p<0.016$)、「醜い-美しい」($t=4.208$

df=213.507 $p<0.0028$)、「きたない－きれい」($t=2.043$ df=176.09 $p<0.0426$)、「鈍い－鋭い」($t=2.026$ df=299 $p<0.0437$)、「嫌い－好き」($t=5.037$ df=297 $p<0.001$)、「わるい－よい」($t=2.123$ df=299 $p<0.0314$)において有意差が見られ、いずれにおいても介護福祉士資格を希望する学生の方がポジティブな評価をしていることが示された。

4. 「祖父母との同居経験」、「高齢者との交流経験」による各項目の平均

「祖父母との同居経験」と「高齢者との交流経験」による各項目の平均値は資料2、3のようになった。それぞれの項目について一元配置の分散分析を行った。

その結果、「祖父母との同居経験」では「話しにくい－話しやすい」($f=3.457$ df=2 $p<0.0327$)、「鋭い－鈍い」($f=3.299$ df=2 $p<0.0381$)、「無能な－有能な」($f=3.414$ df=2 $p<0.0341$)で有意差が見られた。さらに Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、「話しにくい－話しやすい」「鋭い－鈍い」「無能な－有能な」いずれも“同居している”と“同居していない”間で有意差が示され、“同居している”グループの方がポジティブな評価していることが見出された。

「高齢者との交流経験」では「冷たい－暖かい」($f=4.652$ df=2 $p<0.0102$)、「ひどい－すばらしい」($f=20.546$ df=2 $p<0.0001$)、「醜い－美しい」($f=11.612$ df=2 $p<0.0001$)、「話しにくい－話しやすい」($f=9.029$ df=2 $p<0.0002$)、「鈍い－鋭い」($f=7.762$ df=2 $p<0.0005$)、「無能な－有能な」($f=10.871$ df=2 $p<0.0001$)、「嫌い－好き」($f=30.696$ df=2 $p<0.0001$)、「低い－高い」($f=3.405$ df=2 $p<0.0344$)、「劣った－優れた」($f=9.104$ df=2 $p<0.0001$)、「わるい－よい」($f=5.528$ df=2 $p<0.0044$)で有意差が見られた。さらに Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、「冷たい－暖かい」「劣った－優れた」では“多い”と“少ない”間に、「ひどい－すばらしい」「醜い－美しい」「話しにくい－話しやすい」「鈍い－鋭い」「無能な－有能な」「わるい－よい」では“多い”と“普通”間、“多い”と“少ない”間に有意差が見られた。また、「嫌い－好き」では“多い”と“普通”間、“多い”と“少ない”間、“普通”と“少ない”間に有意差が見られた。主観的ではあるが高齢者との交流経験が“多い”と主観的に考えている学生の方が、高齢者との交流経験が“少ない”あるいは“普通”と考えている学生よりもポジティブな評価をしていることが見出された。

5. 「老人」のイメージ

SD法で用いた23の形容詞対を用いて福祉を専攻する学生の「老人」のイメージ構造を把握するために因子分析を行った。共通性の低い2項目を除いて最終的には21項目での主因子法を用いた分析を行った。因子数は固有値1以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性を考慮して4因子を抽出した。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表2に示した。第1

表2 因子分析結果

	項 目	因子負荷量			
		I	II	III	IV
有 能 性	好き－嫌い	0.838	0.127	-1.054	-0.261
	すばらしい－ひどい	0.816	0.110	-0.121	-0.057
	よい－わるい	0.733	-0.084	-0.097	0.071
	美しい－醜い	0.714	0.091	-0.021	-0.057
	有能な－無能な	0.599	-0.012	-0.038	0.251
	優れた－劣った	0.448	0.083	0.095	0.210
	話しやすい－話にくい	0.444	0.028	0.123	0.018
	賢い－愚かな	0.388	-0.287	0.122	0.273
	きれい－きたない	0.356	0.000	0.327	-0.015
活 動 性	正しい－誤った	0.287	-0.215	0.154	0.262
	速い－遅い	-0.069	0.610	0.096	0.201
	忙しい－暇な	0.070	0.596	0.090	0.027
情 緒 性	鋭い－鈍い	0.234	0.445	-0.055	0.205
	うれしい－悲しい	-0.048	0.193	0.608	-0.171
	裕福な－まずしい	-0.080	0.024	0.528	-0.013
	きちんとした－だらしない	0.153	0.012	0.493	0.021
	元気な－病弱な	0.056	0.298	0.445	0.012
力 量 性	暖かい－冷たい	0.292	-0.079	0.324	-0.063
	強い－弱い	-0.070	0.279	-0.039	0.654
	高い－低い	0.124	0.105	-0.145	0.607
	大きい－小さい	-0.166	0.323	0.012	0.475

※主因子法 プロマックス回転による

表3 因子間相関

因子	I	II	III	IV
I	1.0000	0.0131	0.5787	0.5721
II	0.0131	1.0000	0.2133	0.0300
III	0.5787	0.2133	1.0000	0.5575
IV	0.5721	0.0300	0.5575	1.0000

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

表4 資格別因子得点の平均

因子	資格	人数	平均値	標準偏差
第Ⅰ因子	介護福祉士	211	0.1517	0.9394
	社会福祉士	84	-0.1537	0.8001
第Ⅱ因子	介護福祉士	211	-0.0059	0.7653
	社会福祉士	84	-0.0605	0.9052
第Ⅲ因子	介護福祉士	211	0.0143	0.8578
	社会福祉士	84	0.0401	0.8526
第Ⅳ因子	介護福祉士	211	-0.0246	0.8953
	社会福祉士	84	0.1243	0.7658

因子は「好き－嫌い」「すばらしい－ひどい」「よい－わるい」などの項目に代表されるような「有能性」に関する因子であり、第Ⅱ因子は「速い－遅い」「忙しい－暇な」「鋭い－鈍い」から構成される「活動性」に関する因子である。第Ⅲ因子は「裕福な－まずしい」「きちんとした－だらしない」「元気な－病弱な」などの項目に代表されるような「情緒性」に関する因子であり、第Ⅳ因子は「強い－弱い」「高い－低い」「大きい－小さい」の項目から構成される「力量性」に関する因子であった。

また、因子間相関については表3のように第Ⅰ因子「有能性」と第Ⅲ因子「情緒性」、第Ⅰ因子「有能性」と第Ⅳ因子「力量性」、第Ⅲ因子「情緒性」と第Ⅳ因子「力量性」に相関が認められた。

6. 因子得点による分析

因子分析によって求められた個人因子得点を用いて個人属性毎の分析を試みた。

介護福祉士資格取得を希望する学生と社会福祉士資格取得を希望する学生の個人因子得点の平均値（標準偏差）は表4の通りであった。さらに因子ごとにT検定を行った結果、第Ⅰ因子「有能性」に有意差が見られた（ $t=2.811$ $df=177.910$ $p<0.005$ ）。第Ⅰ因子「有能性」に

表5 高齢者との同居経験別因子得点の平均

因子	カテゴリー	人数	平均値	標準偏差
第Ⅰ因子	同居している	138	0.1043	0.9574
	同居したことがある	77	0.0018	0.9521
	同居していない	105	-0.1384	0.9059
第Ⅱ因子	同居している	138	0.0175	0.8152
	同居したことがある	77	0.0981	0.9290
	同居していない	105	-0.0950	0.7939
第Ⅲ因子	同居している	138	0.0857	0.9373
	同居したことがある	77	0.0402	0.7448
	同居していない	105	-0.1421	0.8175
第Ⅳ因子	同居している	138	0.0982	0.9466
	同居したことがある	77	-0.0404	0.8203
	同居していない	105	-0.0993	0.7595

表6 高齢者との交流経験別因子得点の平均

因子	カテゴリー	人数	平均値	標準偏差
第Ⅰ因子	多い	149	0.3001	0.9208
	普通	119	-0.1357	0.9016
	少ない	47	-0.5678	0.7839
	わからない	5	-0.3757	0.7387
第Ⅱ因子	多い	149	0.0585	0.7963
	普通	119	0.0214	0.9196
	少ない	47	-0.2660	0.7226
	わからない	5	0.2485	0.7182
第Ⅲ因子	多い	149	0.0375	0.8727
	普通	119	0.0085	0.8853
	少ない	47	-0.1437	0.7735
	わからない	5	0.0313	0.5921
第Ⅳ因子	多い	149	0.1210	0.9250
	普通	119	-0.0692	0.7844
	少ない	47	-0.2374	0.7900
	わからない	5	0.2737	0.8156

については介護福祉士資格を希望する学生の方がポジティブなイメージを構成していることが示された。

「祖父母との同居経験」による各カテゴリーの個人因子得点の平均値（標準偏差）は表5の通りであった。各因子ごとに分散分析を行った結果、各因子とも、「祖父母との同居経験」による有意差は見られなかった。

さらに「高齢者との交流経験」による個人因子得点の平均値（標準偏差）は表6の通りであった。このうち「わからない」と回答したものを除いて、「多い」「普通」「少ない」の3カテゴリーで分散分析を行った結果、第Ⅰ因子と第Ⅳ因子に有意差が見られた（ $f=19.212$ $df=2$ $p<0.000$ $f=3.692$ $df=2$ $P<0.026$ ）。さらに Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、第Ⅰ因子では「多い」と「普通」間、「多い」と「少ない」間、「普通」と「少ない」間にそれぞれ有意差が見られ、交流経験の多い方が高齢者の「有能性」を高く評価していることが示された。

また第Ⅳ因子では「多い」と「少ない」間に有意差が見られ、交流経験の多いグループの方が「力量性」を高く評価していることが示された。

V 考察とまとめ

本研究では介護福祉士、社会福祉士を目指す社会福祉の国家資格を目指す学生を中心にその「老人観」についてSD法を用いて「老人」のイメージを通して検討することを試みた。先にも述べたように看護学生を対象とした「老人観」の研究は見られるが、各種福祉士の国家資格

を目指す学生の「老人観」に関する研究は知られていない。

今回の研究の結果、「速い－遅い」「忙しい－暇な」「鋭い－鈍い」「強い－弱い」など項目においてネガティブな評価がされているが、それら以外は概ねポジティブな評価がされている。しかし、高齢者の身体的な活動を連想させるものはやはりネガティブなイメージを、福祉を専攻する学生からも持たれていることが示されている。

社会福祉士を志向する学生と介護福祉士を志向する学生間の比較では、「ひどい－すばらしい」「醜い－美しい」「きたない－きれい」「鈍い－鋭い」「嫌い－好き」「わるい－よい」で介護福祉士を志向する学生の方がポジティブな評価をしていることが示されている。これは「介護」という資格の中で高齢者の機能等について直接的に接することが多い、あるいは教育カリキュラム上の特徴としてそれらが高齢者の直接的な問題に触れることが多いため、先入観に惑わされず現実的な「老人観」に対する評価がされやすいためではないかと考えられる。特に有意差が見られた項目をとらえて見ると、一般的に「老人」のイメージとしてネガティブにとらえられがちなものが多い。

また、「祖父母との同居経験」では「話しにくい－話しやすい」「鋭い－鈍い」「無能な－有能な」で有意差が見られ、「高齢者との交流経験」では「冷たい－暖かい」「ひどい－すばらしい」「醜い－美しい」「話しにくい－話しやすい」「鈍い－鋭い」「無能な－有能な」「嫌い－好き」「低い－高い」「劣った－優れた」「わるい－よい」で有意差が見られた。「資格」と同様に同居経験や主観的に接触頻度が多いと考えている学生の方がポジティブな評価をしていることがここでも示されている。特に「高齢者との交流経験」という主観的な接触頻度がポジティブな評価に影響していると考えられる。

因子分析を用いて因子の抽出を試みた結果、「有能性」「活動性」「情緒性」「力量性」の4つの因子が抽出され、多くの先行研究の結果と類似した傾向が示されている。さらに社会福祉士を志向する学生と、介護福祉士を志向する学生間において「有能性」で有意差が示されている。これは各項目で見られたものと同様に、実習等を通して高齢者との接触機会が多い介護福祉士志向の学生の方が高齢者の有能性を認める傾向があることを示していると考えられる。また、「高齢者との交流経験」という交流頻度と老人イメージとの関係でも、主観的なものではあるが交流頻度が多いと考えている学生の方が、交流頻度が少ないと考えている学生よりも「有能性」と「力量性」をよりポジティブに評価していることが示されていた。一般学生との比較ではないため福祉を専攻している学生の特徴としてとらえることには無理があるが、老人観に影響を与える要因として「高齢者との交流経験」という接触頻度がやはり影響していることは否定できないようである。

これらのことから、「祖父母との同居経験」も含めて、保坂と袖井（1986）の老人のイメージを規定する重要な要因としてあげた「老人との現在の交流」が、今回の研究からも「老人の

イメージ」を規定する要因として重要であることが示されと考えられる。さらに、保坂と袖井（1988）や大塚ら（1999）の研究と同様に、老人問題に対する関心や学校教育の中での正しい高齢者に対する知識の伝達や老人教育において老人との会話を持てるようなさまざまな機会を提供することの必要性が確認されたといつてよいであろう。そして今後の課題として現職の福祉職に対する「老人観」について考察することが必要であると考えている。

〈参考文献〉

- 藤田綾子 2000 高齢者と適応 ナカニシヤ出版
- 古谷野亘 児玉好信 安藤孝敏 浅川達也 1997 中高年の老人イメージ - SD 法による測定 - 老年社会科学, 18 (2), 147-152.
- 保坂久美子 袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ - SD 法による分析 - 社会老年学 27, 22-33.
- 保坂久美子 袖井孝子 1986 大学生の老人観 老年社会科学 8, 103-116
- 井上勝也(編) 2005 最新介護福祉全書 8 老人の心理と援助 メヂカルフレンド社
- Kimmel,D.C. 1990 ADULTHOOD AND AGING. New York: John Wiley & Sons, Inc. 加藤義明 (監訳) 1994 高齢化時代の心理学 プレーン出版
- 南博文 やまだようこ 1995 講座生涯発達心理学 5 老いることの意味 中年・老年期 金子書房
- 森幹郎 1989 老いとは何か ミネルヴァ書房
- 長島紀一 佐藤清公(編著) 1990 老人心理学 健帛社
- 中野いく子 1991 児童の老人イメージ - SD 法による測定と要因分析 - 社会老年学 34, 23-36.
- 中野いく子 冷水豊 中谷陽明 馬場純子 1994 小学生と中学生の老人イメージ - SD 法による測定と比較 - 社会老年学 39, 11-22
- 中谷陽明 1991 児童の老人観 - 老人観スケールによる測定と要因分析 - 社会老年学 34, 13-22.
- 成瀬駒男 1991 ヨーロッパにおける老人観と死生観 老年精神医学雑誌 2(8), 998-1004.
- 尾形和男(編著) 2003 これからの福祉心理学 北大路書房
- 大塚邦子 正野逸子 日野瑞枝 日浦瑞枝 白井由里子 1999 看護学生の老人のイメージ - SD 法によるイメージの評価と描画特徴とを中心に - 老年看護学 4(1), 98-104.
- 佐藤真一 1993 老人観 京極高宣(監修) 現代福祉学レキシコン 雄山閣 Pp.334.
- Santrock,J.W. 1985 ADULT DEVELOPMENT AND AGING. Dubuque,IA.: William.C. Brown Publishers. 今泉信人 南博文(編訳) 1992年 成人発達とエイジング 北大路書房

- 新村拓 1991 日本における老人観と死生観の変遷 老年精神医学雑誌, 2 (8), 986-991.
- 橘覚勝 1971 老年学 誠信書房
- 谷口幸一 (編著) 1997 成熟と老化の心理学 コレール社

【キーワード】 社会福祉専攻学生

老人のイメージ

老年観

セマンティック・ディファレンシャル法

資料 1

資格別各項目の平均

項 目	介護福祉士			社会福祉士		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
静的－動的	216	2.475	0.727	85	2.388	0.674
冷たい－暖かい	216	4.134	0.763	85	4.188	0.764
悲しい－うれしい	215	3.028	0.761	85	3.024	0.740
ひどい－すばらしい	216	3.991	0.824	85	3.741	0.742
醜い－美しい	216	3.569	0.810	85	3.212	0.579
話にくい－話しやすい	216	3.782	1.009	85	3.659	0.810
まずしい－裕福な	216	3.204	0.636	85	3.235	0.734
病弱な－元気な	216	3.250	0.880	85	3.200	0.936
邪魔な－便利な	214	3.229	0.502	85	3.129	0.530
だらしな－きちんとした	216	3.625	0.820	84	3.643	0.771
誤った－正しい	216	3.616	0.738	85	3.600	0.775
暇な－忙しい	213	2.507	0.781	85	2.459	0.920
きたない－きれい	215	3.302	0.728	85	3.129	0.632
愚かな－賢い	216	3.954	0.811	85	4.012	0.764
遅い－速い	214	2.173	0.687	85	2.306	0.690
小さい－大きい	216	2.657	0.985	85	2.847	0.994
弱い－強い	216	2.731	0.926	85	2.800	0.910
鈍い－鋭い	216	2.875	0.949	85	2.635	0.857
無能な－有能な	215	3.726	0.800	85	3.671	0.730
嫌い－好き	215	4.400	0.709	84	3.929	0.773
低い－高い	215	3.107	0.816	85	3.094	0.684
劣った－優れた	216	3.653	0.881	85	3.647	0.702
わるい－よい	216	3.931	0.894	85	3.694	0.740

資料 2

「祖父母との同居経験」別各項目の平均値

項 目	同居している			同居したことがある			同居していない		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
静的－動的	141	2.447	0.741	77	2.403	0.693	108	2.481	0.717
冷たい－暖かい	141	4.184	0.723	77	4.182	0.839	108	3.991	0.791
悲しい－うれしい	140	3.036	0.808	77	3.065	0.675	108	2.991	0.730
ひどい－すばらしい	141	3.908	0.827	77	3.805	0.844	108	3.880	0.794
醜い－美しい	140	3.500	0.791	77	3.416	0.817	108	3.361	0.716
話しにくい－話しやすい	141	3.837	0.976	77	3.688	1.016	108	3.509	0.942
まずしい－裕福な	141	3.248	0.678	77	3.143	0.738	108	3.204	0.623
病弱な－元気な	141	3.312	0.919	77	3.195	0.859	108	3.167	0.848
邪魔な－便利な	140	3.207	0.487	77	3.156	0.515	107	3.206	0.595
だらしない－きちんとした	141	3.674	0.882	77	3.701	0.708	107	3.458	0.780
誤った－正しい	141	3.617	0.762	77	3.597	0.799	108	3.546	0.728
暇な－忙しい	138	2.471	0.847	77	2.623	0.795	108	2.435	0.789
きたない－きれい	141	3.220	0.728	77	3.273	0.681	107	3.215	0.687
愚かな－賢い	141	4.014	0.784	77	3.883	0.811	108	3.880	0.828
遅い－速い	140	2.207	0.694	76	2.316	0.752	108	2.176	0.653
小さい－大きい	141	2.780	1.049	77	2.753	1.066	108	2.583	0.799
弱い－強い	141	2.858	0.983	77	2.688	0.892	108	2.685	0.861
鈍い－鋭い	141	2.929	0.976	77	2.805	0.844	108	2.630	0.871
無能な－有能な	141	3.794	0.797	77	3.649	0.807	107	3.533	0.756
嫌い－好き	141	4.255	0.721	76	4.329	0.806	107	4.065	0.850
低い－高い	141	3.113	0.829	76	3.053	0.710	108	3.083	0.738
劣った－優れた	141	3.723	0.820	77	3.623	0.844	108	3.509	0.837
わるい－よい	141	3.837	0.867	77	3.831	0.923	108	3.778	0.835

資料 3

「高齢者との交流経験」別各項目の平均値

項 目	同居している			同居したことがある			同居していない		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
静的－動的	156	2.442	0.738	123	2.403	0.71521236	47	2.46809	0.687
冷たい－暖かい	156	4.231	0.744	123	4.182	0.839	47	3.85106	0.807
悲しい－うれしい	156	2.974	0.762	122	3.065	0.675	47	3.08511	0.654
ひどい－すばらしい	156	4.141	0.791	123	3.805	0.844	47	3.40426	0.712
醜い－美しい	156	3.641	0.827	122	3.416	0.817	47	3.19149	0.576
話にくい－話しやすい	156	3.910	0.883	123	3.688	1.016	47	3.29787	0.883
まずしい－裕福な	156	3.205	0.669	123	3.143	0.738	47	3.17021	0.601
病弱な－元気な	156	3.224	0.884	123	3.195	0.859	47	3.2766	0.826
邪魔な－便利な	154	3.234	0.581	123	3.156	0.515	47	3.12766	0.397
だらしない－きちんとした	156	3.590	0.810	122	3.701	0.708	47	3.51064	0.882
誤った－正しい	156	3.628	0.755	123	3.597	0.799	47	3.61702	0.768
暇な－忙しい	154	2.539	0.864	122	2.623	0.795	47	2.38298	0.768
きたない－きれい	155	3.258	0.728	123	3.273	0.681	47	3.17021	0.601
愚かな－賢い	156	4.019	0.807	123	3.883	0.811	47	3.78723	0.750
遅い－速い	154	2.266	0.677	123	2.316	0.752	47	2	0.590
小さい－大きい	156	2.731	1.062	123	2.753	1.066	47	2.40426	0.712
弱い－強い	156	2.833	0.996	123	2.688	0.892	47	2.61702	0.795
鈍い－鋭い	156	2.981	0.967	123	2.805	0.844	47	2.42553	0.773
無能な－有能な	155	3.858	0.777	123	3.649	0.807	47	3.29787	0.587
嫌い－好き	154	4.455	0.677	123	4.329	0.806	47	3.51064	0.777
低い－高い	155	3.200	0.833	123	3.053	0.710	47	2.91489	0.775
劣った－優れた	156	3.795	0.809	123	3.623	0.844	47	3.23404	0.813
わるい－よい	156	3.974	0.894	123	3.831	0.923	47	3.57447	0.715